

STAR BEAT!～地球を撃ち抜く瞬間に～

ナナバナナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は、友を騙し、慕ってくれる少女たちも騙し、全てを敵に回した。きっと彼が救われることはない。

目次

プロローグ この小説は実にありがちな転生物です | 1

第一章 キラツキラドツキドキな中学校生活編

第1話 転生しちやった!?! | 13

第2話 星を統べる者 | 22

第3話 迷子の海月姫 | 33

第4話 Lesson1 「毒をもって

毒を制す」 | 49

第5話 想定外で最低な1日 | 66

第6話 深まる謎と地下室 | 79

プロローグ この小説は実にありがちな転生物です

目が覚めると俺は知らない部屋にいた。……頭が凄く痛い。薄暗い部屋にポツンと明かりが一つ、俺を照らしている。寝起きから頭が回り始めて、思考がクリアになり、俺はやつと自分の身に何が起きたのかを思い出す。

「そうだ……俺は誰かに襲われて――」

学校の帰り道、いつもと同じ道を帰っていたら後ろから誰かに頭を殴られて気を失っていたんだ。どおりで頭が痛むわけだ。

慌てて立ち上がろうとするものの、それはできなかつた。それもそのはず、俺は何者かによって座らされていた椅子にロープで括りつけられていたからだ。

「くっそ、何で俺がこんな目に……誰かああ助けてえええ!!」

もう訳わかんなくて泣きそう。助けて！ライナアアアアアア（混乱）

「やつと起きたか？」

「やった！助かった！」

「残念だったな、俺がお前を誘拐してきたんだよ☆」

「マジかよ…」

現実是非情である。チクシヨウメー!!!!!! (総統閣下並感)

声のするほうを見ると、全身に血を滲びたかのようなワインカラーのボディに、水色のクリスタルのような物でベネチアンマスクのように目を覆っていて、胸部にも同じ素材でコブラの装飾を施した男が壁に寄りかかっていた。

そしてそいつのことを俺は知っていた。

「ブラッドスタークじゃん…」

そう、そいつは仮面ライダービルドに登場するラスボスにして全ての黒幕、ブラッドスターク（本名エボルト）だったのだ！どっちで呼べばいいの俺？

「おつ、俺のこと知ってるのか。うれしいねえ。」

「なにこれ、ドッキリ番組か何かか？」

「おいおい失礼しちゃうぜ。俺は本物のブラッドスタークだぜ？お前たちの知ってる

『仮面ライダービルド』の世界からやってきた”ホンモノ”さ。」

「ああ、そういう設定……」

パァーン！

そこまで言いかけて、俺のつま先のほんの数センチ離れた床から煙がたった。どうやらやつ持っているトランスチームガンはおもちやではないらしい。

「マジかよ……」

「ジョークでもフィクションでもない、現実さ。」

「ありえない……一体どうやって？」

「んー……”想いの力”ってやつかな？」

「オモイノチカラ？」

こいつってそんなロマンチストだっけ。そう思ったのも束の間、スタークは俺を指さしながら説明を続けた。

「お前たちこの世界の人間は『仮面ライダービルド』という物語を作り出した。それを見た人間が、ビルドの世界に行ってみただとか、もし自分がビルドの世界の住人だったら、なんて想像をして、その思いが蓄積されてビルドの世界ができちまったんだよ。」

「……つまり並行世界みたいなものか？」

「まあそんなところだ。物語の数だけ、人の願いの数だけ世界は無数に存在するわけだ。そしてそこからまた更に並行世界が存在する。」

「？」

「言い方が悪かったか？簡単に言うと『仮面ライダービルド』の世界は何千もあるんだよ。」

「その感じだとお前は戦兔達との最終決戦の前にこの世界に逃げて来たエボルトってことか？」

俺が何となくそう聞いてみると、奴は興奮した口調でこう続けた。

「いいや違うね、俺は勝ったんだよ。」

「勝っただと……？」

「そう！俺は勝ったんだ！俺は他の世界の俺とは違う！俺は油断しなかった、慢心もしなかった！俺は何千もあるビルドの世界の中で唯一仮面ライダーたちに勝利した存在なのさー！」

「驚いた、戦兔達が負けた世界線も存在するのか……。」

「地球を吸収した後俺は多くの星を吸収した。そして惑星のエネルギーのほぼ全てを使ってこの『仮面ライダーがフィクションの世界線』にやって来たのさ。」

俺はスタークの話を一通り聞いて少し考えた。こいつが嘘を言っていて実はよ

く出来たスーツと銃を作った重度の特撮オタクの可能性や、ドツキリの企画なのかも考えたが、なぜだかこいつの話は嘘じゃない気がした。いや、ほんとに直感的で言葉にはできないんだけど。

…だが一つだけわからない点がある。俺はそれをはつきりさせるための質問をしなければならぬ。

「…お前がこの世界にきた目的はこの『仮面ライダーがフィクションの世界線』の地球を吸収するってことかな?」

「いいや? 違うね。まあ最終的には此処の地球も吸収したいところではあるんだが…その前にやりたいことがある。」

「やりたい事?」

「そうさ。そのやりたい事にお前は必要不可欠なのさ。」

「わかった! 家族ごっこ!」

「残念不正解。それはもうやったからもうやらん。…お前にやつてもらいたいことがあるからわざわざ誘拐までして此処まで連れて来たんだよ。」

「お? もしかして聞けちゃう? 俺がこんな酷い目にあつてる訳。」

「聞けちゃう聞けちゃう。…まずはこれを見て欲しい。」

スタークはそう言うと、どこからともなくスマホを取り出してアプリを起動させ

た。

?ブ○モ!／

?クラフト○ツグ!／

?バンドリ!ガールズバンドパーティー!／

……

……

……

はあ?

え、何こいつまさかソシャゲと一緒にプレイするただに俺のこと攫って椅子に縛り上げてんの?後ろから俺の頭かち割ってまでやりたいことがソシャゲ??別の世界線にまで来てやりたい事がソシャゲ???なーにがバンドリ!ガールズバンドパーティー!(声真似) じゃい、てめえら二度とバンド活動ができないようにしてやるぞ?

(過激派)

スタークは脳内でキレ散らかしてる俺の事をお構い無しで説明を続けた。

「お前にはこの『バンドリ!』の世界に転生してもらおう!」

「俺そのゲームやったことないんだけど…」

「マジかよ、音ゲーやらないタイプの人間か君? 結構売れてるゲームのはずなんだけどもなあ…」

「どうやら一緒にゲームしよう? という訳では無さそうだな。…それよりもヤバいワードが聞こえた気がするのは気のせいかな? 転生しろとか言われた気がするけどさすがに聞き間違いか! (現実逃避)」

「まあ向こうでやって欲しいことはバンドリ!を知らなくてもできることから問題ないよ。」

「別の世界に転生までさせてさらにまだやって欲しいことまであるんすか…?」

「ああ、お前は俺様、ブラットスタークとして転生して『バンドリ!』の世界をぶち壊す。簡単なことだろ?」

「自分が簡単にできることはみんなも簡単にできるって考え方、やめた方がいいよ。」

スタークに今後役立つであろう知識を教えつつ、俺は言われたことを頭の中で整理する。ここまで話をまとめるとこいつは並行世界からやってきた存在で、俺に別の

ゲームの世界に行つて来て欲しいという。

…だめだ、俺が今こんな目にあつて理由がわかるかと思つたらさらにわからんことが増えただけだった。…一応理由を聞けるだけ聞いておこうかな。

「なんで自分でやらないんだ…？めんどくさくなつちやつたとかか？」

「ああ、それは俺がこの世界から出られないように制限されているからだな。折角手に入れた『世界を旅する能力』も満足に使えないんだよ。まあもし仮に使えたとしても今は力が残つてないからどつちみち無理なんだけどな。」

「移動を制限されてる…？一体誰に？」

「ん〜、一言で表すならこの世界の神様かな？」

なんと、この世界にも神様なんてスピリチュアルなものが存在するとは。今まで神とか幽霊とか信じてなかったけどこれを機にそういったものを信じることになりそうだな。…というか神様これ見てるんじゃないの？なんか天界みたいなどこから。神様お願いです、今俺たちを見てるなら目の前にいるこの世界への不法侵入者を聖なるパワー？で取り締まってくださいお願いします。カミサマア……（懇願）

「あともう一個聞きたいことがあるんだけど。」

「言つてみな、答えれる範囲なら答えてやるよ。」

「なんで『バンドリ！』なの？他にも色々な物語はあるだろ？このチョイスは単なるお前

の趣味なのか？」

「ああそれね。お前に『バンドリ！』の世界に行ってもらうのにはちゃんとした理由があるんだよ。」

「その理由とは？」

「それはな…そこから強大なエネルギーを感じとつたからなんだよ。それこそ俺が今まで吸収してきた星なんか比べ物にならないほどのな。」

なるほど、だいたいわかった。(某破壊者) 要はスタークのお使いって訳だ。俺はバンドリ！の世界に転生してスタークの代わりにその強大なエネルギーとやらを取って来ればいいわけだ。…あれそうしたらこの世界終わるんじゃないや「あと向こうの世界に行ったら君帰って来れないからね。」あれま

「まあ並行世界に移動できないなら、周りの適当な星を食べつつ誰かが地球を侵略するところを観戦でもしてみようかなって気まぐれよ。そういうった楽しみ方も悪くないかなって思ってたな。」

「極めて生命に対する冒涇のような何かを感じる。」

「お前達人間が虫かごの中のカマキリを観察するのと一緒さ。」

「まるで自由研究だな。」

「いいや、育成ゲームさ。」

「…そうゆうことにしとく。」

ゲーム感覚で俺を並行世界に飛ばすのは気に入らないが、まあここで死ねえ！とかされる訳じゃなさそうなのでそこは少し安心してる。いや安心はできないな。

「というわけで『バンドリ！』の世界の地球を君に吸収して欲しいんだ！あれほどのエネルギーだ…吸収したお前はきつと俺を超えた最強の地球外生命体になれるはずだ！」

「まだやりますって言ってないですよ、俺？」

「…え、何言ってるんだ？転生確定だよ？」

「やだ。」

「ダメ。きまり。」

「…：わかりましたよ！ここに縛られてる時点でなんとなく俺に拒否権ないのはわかってました！」

「そうか！君ならそう言ってくれると思ったよ！」

くそ…俺に選択の余地はないのか…最悪だ。

「なら早速転生の準備だ。まずは1週間の拷問から始めよう！」

「何で？」

「何でって、こういうった物語は不幸な目に合うところから始まる物なんだろ？ネットの小説でちゃんと勉強したんだぞ。ほらムカデもあるよ。」ムカデチャンウネウネ

「クク…健闘を祈るよ…少年。」

第一章 キラツキラドツキドキな中学校生活編

第1話 転生しちゃった!?

目が覚めると知らない天井。知らない部屋。 ……どこだ此処？俺は本当に異世界に来たのか……………？疑問は尽きないが、考えていても仕方ない。とりあえず顔を洗おう。洗顔大事。

「…………洗面所探すか。」

今日初めてきた知らない家だからどこに何があるかもわからない。とにかく探すしかない。自分が寝ていた部屋のドアを開け、階段を降りる。どうやら俺がいた部屋は、この家の2階にあるらしい。程なくして俺は洗面所を見つける。しかし、俺はそこでもないものを目にした。

「…………は？誰だ……………こいつ？」

結論から言うと、俺の顔が違っていた。そういやスタークは煙みたいなので顔を変えられる能力を持つてたからなあ。その力を使ったのなら俺の顔が違うのにも合点がいく。鏡に映る自分は、俺がよく知ってる俺ではなかった。新しい俺の顔は、世間一般ではおそらくイケメンの部類に入ると思う。10人に聞いたら7人はイケメンって言ってくれるはずだ。間違いない。顔のパーツが整っていて、黒髪は短髪で爽やかな感じがでてる。おまけに肌も綺麗で清潔感がある。

……でもねえ、スタークさん。違うんすよ。確かにこつちのほうが顔がいい。誰だってそう思う。俺もそう思う。けどなあ!たとえ俺の顔が中の下であっても!イケメンじゃなかったとしても!十数年連れ添ってきたマイフェイスに愛着がわかないわけないんだよなあ!返してくれよお!俺の顔を!!

「人の顔を変えるなあ!許可なくウウウウウウウウウウ!!!」

「おいおい、朝から元気だな、近所迷惑だろ。」

「やべっ、つい叫んじゃまったわ。」

いかんいかん。取り乱してしまった。まだ寝てる人もいるかもしれないから。素数を数えて落ち着こうか。

………ん？俺今誰と喋ってんだ……？

鏡を見ると、さつきまでは誰もいなかったはずの俺の背後に、中年くらいの（目測）おっさんがいた。音もなく、気配なんて感じれなかった。まさか…

「ミラーワールドか!？」

「いや、普通に後ろにたってるだけだわ。」

後ろを振り返ってみると、そこにおっさんはちゃんと言った。てか普通に考えたら後ろにいるだけだよな。何がミラーワールドだ。耳鳴りしてないし、ありえんだろ。

…スタークいたからありえんこともないか？

ところ変わってリビング。俺はおっさんが作ってくれた朝食を食べていた。トーストと目玉焼き、そして簡単なサラダ。どうやらおっさんは朝メシはパン派らしい。俺は米派だ。トーストを齧り、咀嚼し、飲み込んだおっさんは、俺を見つめる。

「さて……何から話せばいいかな。とりあえず自己紹介をしよう、俺は石動優一。この世界ではお前の叔父っていう設定になっている。」

「設定とかあるんすか。」

「そして今日からお前の名前は石動響真だ。」

「はあ?!俺名前変わるんすか?!聞いてないっすよ?!」

「まあ、そう言うなって。ほら、響真ってかっこいいだろ?」

いや、そういう問題じゃないと思うんだけどなあ…。

「そして、響真には俺に色々と質問をする権利がある。」

そうだな、聞きたいことは山ほどあるが…

「まずは確認、俺のやるべき事は、地球を滅亡させること、でいいんですよね?」

「そうだ。響真はスタークとして地球を破壊する、俺はそのサポートをするためにやってきたってわけ。」

「なるほど。俺は何からやればいいですか?」

「まあそう先を急ぐな。地球滅亡作戦は時間をかけて慎重に行う。絶対に失敗はできないからな。」

そうだな…失敗はできない。もし俺が失敗して、次の誰かにこの役割が回ってくるのな

ら…地球の滅亡が成功するまで繰り返すなら………こんな思いをするのは俺だけで十分だ……！」

「すみません。ちょっと焦ってたみたいです。」

「いいんだよ、熱意があるってことだろ？安心したよー。」

「いや、俺が此処にいるの、自分の意思じゃないすつよ？熱意なんて微塵もない。ターゲットに無理矢理連れて来られた感じなんで。」

「ハハハッ！そりゃそーだ！地球をぶっ壊すのに乗り気なのは、狂人くらいだろうからな。ハハッハハハ……ハア……。」

え？何か優一さん急に落ち込んだんだけど？情緒不安定なの？怖い怖い。

「俺さ…ブラットスタークに嫁さんと娘を殺すつて脅されて、こつちに来たんだよ。あいつに出会わなければ、俺は……。」

「……奇遇ツスね…俺もそんな感じですよ。」

「マジ？あいつヤバすぎじゃない？」

「いや、ほんと歩く理不尽みたいなの？」

しばらくの間、俺と優一さんはスタークという男の極悪非道について語り合った。あの野郎傍からみてるぶんには、憎めない悪役でかっこいいんだけどなあ…関わりたくはないんだよね、人生めちやくちやにされるし（現在進行形）、できれば出会いたくなかった。

「まあ、あいつの話はこれくらいにして、他に聞きたいことは？」

「えっと、そうだな…俺は人間ですか？」

「ああ、今はな。」

…なるほど。これから地球外生命体になるって感じなのか？ずいぶんと回りくどいなあ。

「本来だったたら、響真がこの世界にきた時点で、スタークの力を使えるはずだったんだが…どうやら、俺たちのことをよく思っていないやつ妨害があったみたいでな…。」

「妨害？火星の王妃か?!」

「いや、俺たちの邪魔をする存在は…おそらく〈神〉とやらだ。」

「神?。」

「神イレギュラーによる異常事態によつて、響真はかなり力を失つた…。だから、まずは失つたスタークの力を取り戻すところから始めよう。」

「なるほど。」

「まさか、生命エネルギーまで奪われて身体が若返つてしまふなんてな…ほんと想定外だよ。スタークからは高校生だつて聞いたけど、見たところ中学生くらいかな?」

「なるほど?。」

「そうゆう訳だから、明日から中学校に行つてもらおうから。これ、学校の資料ね。」

「なるほど?。」

いや、さつきから言つてること何一つわからないんだが?俺中学生なの?俺高2だったんだよ?えつ興味無い?そつか。

「まあ、色々話したけど、俺はお前の味方だから。これからよろしくな、響真。」

スつと右手を差し出す優一さん。それに応じて俺は握手をする。

「こちらこそ、色々とお世話になります。」

「ああ、俺たちは運命共同体だ!ところでコーヒー飲む?」

「いただきます。」

優一さんは2つのカップにコーヒーを注いで、片方を俺に渡す。俺はそのままコーヒーを啜る…

「!?ゴフツ!ゲホゲホ、ハアハア…いやマツズ!!」

「あ、ブラック駄目だった?」

「いや、そうゆう次元の問題じゃねえ!なんつーか、このコーヒー苦いっていうよりエグい!」

いやこんなコーヒー飲んだことないんだけど!絶望的に不味いんだが。

そういうえば、エボルトはコーヒーを作るのが下手って設定だったつけ。優一さんマスタージョジなのか?

「まあブラックが飲めないってのはお子ちゃまってことだな!ハハハ!」

「絶対にあんたがおかしいよ…!」

いつか必ず優一さんが間違ってるって証明してやる。俺は、そう心に固く誓ったのだった。

第2話 星を統べる者

「満開の桜に雲一つない晴天、麗らかな春の日差しは――」

どーも。石動響真です。俺は今中学の入学式に出席しているよ！ いやー、みんな緊張してるのかな？ なんとというか初々しい感じ？ こうやって子供たちは大人になっていくんだなあって。感慨深いよ、まったく。

え、俺？ 俺は1ミクロンも緊張してねえよ。2回目だから親目線で、入学式を楽しんでるのよ。いや、それにしても、校長先生の話って聞いてても、教室までの道のりでほぼほ忘れちゃうよね。えっ、お前だけだって？ そんなわけあるか。

「以上で入学式を終了します。一同、起立」

お、終わったみたい。いやー、入学式だったから中々に気合いの入ったスピーチだったね。よかったよ、校長。

まあ途中から聞いてないんだけどね。ごめんね。

入学式も無事終わり、事前に知らされていた教室に到着。それぞれ自分の名前がある席に着席している。みんなソワソワしてるなあ……同じ小学校のやつとか多いんだろうけど、やっぱ新しい環境に身を置くのってドキドキするもんな。

さて、入学式が終わった後のHRといたらいったい何をしよう？　そう、自己紹介！　この自己紹介タイムの印象はこの先1年間の中学校生活を左右すると言っても過言！　とつても大事なんです？

やべっ、どうでもいいこと考えてたら俺の前のやつの番になってたわ。出席番号4番

だから、すぐに俺の番。どうしよ、言うことなんも考えてない……あ、前のやつ終わった。

「えつとー、石動響真です。僕は、最近この辺りに引越して来たので、この街のこととか教えてもらえると嬉しいです。1年間よろしくお願いします」

当たり障りのないことを言つて、席に座る。まあ、普通でいい感じの自己紹介になったんじゃないかな？

あ、ボケると思つた？ 残念！ しつかり陰キヤなので、よく知らない人の前でそんなことできません！

クラス全員の自己紹介が終わつて、担任の話を聞き、大量のプリントを受け取り、そんなこんなで、初日は解散。明日から本格的に授業が始まつていくらしい。

……シンプルにだるいな。何で高校生じゃないんだよー、転生物つて高校の入学から始まるよね？（そんなことはない）まったく許せねえよ、神とやら。

そんなことを考えてたら、近くの席のやつらが話しかけてくれたので、少し喋つてから、俺は家に帰ることにした。

さて、帰り道。俺は、この世界に来たばかりなので、当然友達なんて1人もいない。だから、1人寂しく下校をするはずだったのだが……俺は今同じクラスになった女子と一緒に

に、信号が赤から青に変わるのを待っている。

そして、ここで一つ問題がある…そう、それは…

名前がわからん!!!

やべえつて、どうしよう！クラスメイトの顔はだいたい覚えれたけど、名前がまだ一致してない！誰だったかなーこの人。同じクラスの女子ってことしかわからない！

少なくとも俺より出席番号は後だったはず…いや、あんま参考にならないなあ！4より後つて…全然絞り込みできないじゃん！

…大丈夫、まだ1日目。覚えきれてなくてもしかたない、しかたない。幸い、この場で彼女と会話しなければならぬわけじゃないし…。

俺は、顔を動かさないように、彼女をちらつと見る…。チラツ

え…ちよつと待つて…

向こうもチラチラ見てるんだがア!?

向こうチラチラ+俺チラチラ||…目え合っちゃった!!やばい、もう気づいていないふりはできない!もしこのまま、何も無かったかのように振る舞えば、俺は彼女から

感じ悪いやつ認定されてしまうのでは?!

…いや?よく考えたら入学初日?なら、声とかかけなくてもしかたないんじゃないか?

…よかったー!初日から急激に距離を縮めすぎたらよくないよな!向こうびつくりしちゃうもん。だから、ここで無理に声をかける必要はない…

「同じクラスの石動響真君だよね?!」

…

ああ。(絶望)

向こうから声かけてくるのかよ……まずいことになったな……別に彼女とお話することに問題はない。俺は女子とも会話ができるタイプの陰キヤだからな……まあ、自分から話しかけたりはしないけど。

でも、名前がわかんないのは、さすがに失礼！向こうが俺の名前知ってるならもつと失礼!!とりあえず返答しなきゃ。

「ソウデスネ。」

どうする?もう名前聞いちゃおうかな?いや、ダメだ、よくない!……あれ?何か、一緒に信号待つてる親子めっちゃこっち見てない?……もしかしなくても、お母さん?!

絶対そうだよ、あの格好は彼女の入学式を見に来た母親と妹!余計に名前聞きづらくなっちゃまった!あ、優一さんは仕事でいないよ。じゃなくて!やばいもう終わりだ……

「香澄、その子は友達?」

「うん!同じクラスなんだよ!」

…お母さん、ありがとう!!カスミ…そうだ思い出した、戸山香澄!よかったー、思い出せて。

「戸山さん、帰りこっちななの?」

信号が青になったので、歩きながら聞いてみる。

「うん!ねえ、響真君ってどの辺に引越してきたの?」

「あっち。」

「ホント?!私の家もあっちの方なんだ!途中まで一緒に帰らない?」

「俺は別にいいけど、戸山さんのお母さんたちは…」

「あら?それなら私たちは先に帰るわ。それじゃあ、響真君。香澄と仲良くしてあげてくださいね。」

そうやって、戸山さんのお母さんと妹さんは、先に行ってしまった。それにしても、戸山さんの距離の詰め方は間違いなく陽キャだね（確信）。響真は一緒に帰る人を見つけた。やったね？

戸山さんと喋りながら歩いてるわけだが、結構な時間が経っても、帰る道が別にならない。もしかしたらかなり近所なのかもしれない。

「それでね、小さい頃に家族でキャンプに行つてね！空いっぱい星を見てね、”星の鼓動”が聞こえたの！」

「えつと……”星の鼓動”？」

「うん！キラキラドキドキするんだよ！」

な、何言つてんだろ、全然理解できん。でも待つて、”星の鼓動”……？もしかして戸山さん……

星を滅ぼす才能あるのでは?!

間違いねえ、おそらく惑星には生命エネルギーみたいなものがあつて、戸山さんはそれを感じ取ることが出来る…! うん、やっぱり星狩りの才能あるよ、君! なら、俺のすべきことはただ一つ、戸山さんから”星の鼓動”の情報を少しでも多く聞き出すこと!

”星の鼓動” つて今も聞こえてるの?”

「ううん、あの時だけ。でも、星を見るのは好きだよ!」

「へえ…」

「でも、今はドキドキしてるかも！」

「どして？」

「なんか新しいことが始まる気がするから！」

もしかして星の鼓動つて、戸山さんの心音なんじゃないかな？話聞いとると、そうとしか思えなくなってきた。でも、星の鼓動か…ぶっ飛んでるようだけど、すごくいい感性してると思う。

「見つかるといいね、キラキラドキドキすること。」

「うん！」

「じゃあ、俺こっちだから。また明日、戸山さん。」

「うん！また明日！」

戸山香澄か…人には無いなにかを持つてるのかもかもしれないな。ちなみに、戸山家と石動家は同じ町内で、通りが一つ違うだけらしい。近エ!!

第3話 迷子の海月姫

「ただいまー。」

俺は今朝貰った家の鍵を使って、玄関のドアを開けて、誰もいない家に入る。…なんか、帰ってきたって感じしないんだよなー。まだ他人の家におじやましてる感覚だわ。でも挨拶大事だからね？それに、もしかしたら優一さん帰ってきてるかもしれないし。靴を脱いで、リビングに入るが、やっぱり優一さんは帰ってないらしい。とりあえず、自分の部屋に靴を置いてきて、キッチンにある冷蔵庫を覗いてみる。

…すぐに腹を満たすことができる物がないことを確認して、冷蔵庫の扉をそつと閉じる。冷蔵庫の中身勝手に食べるのも悪い気がするしね。

まあ夜まで我慢するか。そう思って、リビングのソファに行こうとすると、テーブルの上に書き置きがあることに気づいた。

『ここにあるお金使ってショッピングモールまで来てねー』

フードコートで待ってるよー』

書き置き横には3000円が置いてあった。なるほど、これは…

昼飯代込みだな。

はい、私は今電車で揺られています。書き置きの裏側に、道のりが記されていたので、それだけを頼りにショッピングモールを目指している。

お、この駅で降りる…はず…うん、合ってた。まだ来たばかりだから駅もよくわかってないんだよな。

電車を降りて、改札に切符を通して、駅を出る。すると、目の前に大きな時計があり、それを取り囲むようにベンチが置いてあったので、そこに座る。もう一度、シヨツピングモールまでの道を確認したいのだ。

…なるほど、だいたい大通りに沿って行けばたどり着く感じだな。よし！行こうか
「ふええ〜、〜どこどこ〜？」…え？

いや、ふええって何？鳴き声か？俺は気になつてしかたなかったので、ふええの正体を探すべく、声のした方を見る。あ、あののかな？水色のロングヘアの女子が、スマホ片手にキョロキョロしてるのがここから見える。

「今、時計の前にいるから、シヨツピングモールはこっち…？」

水色の女子がそう呟きながら行こうとする方向は、俺の手元にある地図とは真逆の方向だった。

…いや、これどっちだ?!優一さんの地図が間違ってるのか、彼女が勘違いしてるのか、俺には判断がつかない。

…あの人スマホ持ってるし多分方向が正しいな。優一さんには後で文句言つてやらんとな（決めつけ）

なら本当の道を彼女から聞かないとな。めっちゃ恥ずいけど、仕方ない、声をかけて教えてもらうしかない…！

「あの…すみません、ショッピングモールまでの道のりを教えてもらいたんですけど、お願い出来ますか？」

「ふえ?!わ、私ですか？」

「ショッピングモールに行こうとしてるのなら道を教えてもらいたくなって思つて…嫌なら断つてくれて大丈夫ですよ。」

「あつ、嫌とかじゃないんです…ただびっくりしただけで…」

「あつ、ごめんなさい。」

「こちらこそ。」

2人で謝りだして、ごめんなさいが行き来する。うーん、この日本人たちめ。話が進まないで、本題を切り出す。

「実は、ショッピングモールに行きたくて、地図を貰ったんですけどね？なんか間違ってるみたいで…」

「そうなんですか…」

「この地図だとあっちに行くことになってるんですけど、スマホだとどうなってますか？」

「えっと…あっちですか？」

「ああ、なるほど、ありがとうござい…ちよつと待ってください、あっちじゃなくないですか?!」

「えっ?」

「…少しスマホ貸してもらえますか?」

彼女からスマホを借りて、地図と見比べてみる。…うん、これ地図あつてたわ。やっぱり優一さんなんだよなあ（手のひらドリル）

「すみません、地図あつてたみたいです。スマホありがとうございます。」

俺は、スマホを返して最後に軽く会釈をして、その場を後にする。彼女には悪いが、

迷ってみたいだがシヨツピングモールまで案内する義理なんてないからな……

いや、別に誘う勇気がないとかじゃないから。決して「よかつたらシヨツピングモールまで一緒に行きましようか？」って言つて、苦笑いを薄らと浮かべられながら断られるのが怖いとかじゃないから。もし一緒に行くとしても？到着するまで気まずいじゃん？だから誘わないんだよ（早口）

まあ俺も鬼ではない。俺がシヨツピングモールに行くことを知ってるなら、あの子は俺のあとをついてくればいい……いい感じの距離を保つてついてくるはず……誰だつてそうする、俺もそ「あつ、あの！」

突然声をかけられてびっくりしたが、振り返つてみると先程の水色の女子がすぐそこ

にいた。…なんで??

「えつと…シヨツピングモールまでついて行かせてください。お願い…します…」
「あー、もちろん！いいですよ。」

…まさか向こうから声をかけてくるとは、予想外だよ。方向音痴ちゃん(仮名)に、なぜか顔を真つ赤にしながら頼まれたので、俺たちは一緒にシヨツピングモールに行くことになった。

というわけでね、俺は今、方向音痴ちゃんと一緒に目的地を目指して歩いていきます。シヨツピングモールは駅からかなり近いらしいからね。

テクテク…

テクテク…

それにしても気まずい。隣に並んで歩いているのに会話は全くない！靴の音と、車の音、そして街の喧騒がやけにうるさく感じられる。変な緊張感があつて、手が汗ばんでいるのが嫌でもわかる。

こうゆうとき、なんか気を利かせて話題を振るべきなのだろうか。いやでも話しかけるのは迷惑か？あーもう何が正しいのかわかんなくなってきた。助けてライナー。

チラと彼女の方を見てみると、しっかりと目が合う。すると、彼女は慌てて目を逸らした。ああ：すぐくデジャブ。なんかさつきもこんなことあつた気がするんだけど。

目があつてしまったならもう話しかけるしかない。それこそこのままアクションを起こさないのは、気まずくなる一方だからな。奥の手、使っちゃいます。

「ツスーーーーー……天気いいっすね……」

天気デッキ!!

天気デッキとは、初対面の相手や、あまり話したことない人との会話に困った時に用いられる会話デッキの一つである。天気デッキの歴史は古い。一説によると、とあるコミュ障の男がまだあまり親しくない女性に対して使ったことが起源だとされている。会話デッキには、他にも死生観デッキなどがあるが、あれは上級者向けなので素人が手を出していいものではない。

天気デッキは話題性としては会話デッキの中でも最弱。しかし！その高い汎用性は数多の会話に困った人たちを救ってきたのであった！

初対面の相手なら天気デッキはかなり強い！これが俺のゼンリヨクだ！さて、方向音痴ちゃんの反応は…？

「……………そ、そうですね。」

あ、やべ…

これ詰んだわ!

あんま反応よろしくないです!というか俺がせっかく話せるような会話のパス出したのに:受けとめるだけじゃなくて返してよ!会話ってひとりじゃないの!!みんなの!!!まあ、天気の話なんて話が広がらないか。それに、方向音痴ちゃん話したりする事苦手そうだからね、しょうがないかな。

ふと、彼女の方を見てみると、かばんにストラップがついているのが見えた。なんだろう、あれ…

「うーん、宇宙人？それ？」

「ふえ？こ、これですか？クラゲですよ。」

「あーなるほど、好きなんですか？クラゲ。」

「はい…。プカプカ泳いでるのが可愛くて…」

「あーなんかわかるかも。」

突然、目を輝かせながらこちらを見る方向音痴ちゃん。何？その目、まるで同士を見つけたかのような…。しばらく見つめ合っていると、彼女は顔を真っ赤にして目を逸らす。

「クラゲの可愛さ…友達に言ってもあまり理解してもらえなくて…あんなに可愛いのに…だから今、…えつとあなたにわかってもらえてつい嬉しくなって…」

「確かにクラゲは好き嫌い別れるかもなー。」

少し笑いながら返して、俺は今がチャンスだと確信する。名前を知るチャンスだ。自己紹介しそびれてお互い不便だったからな。

「石動響真。」

「え？」

「俺の名前です、自己紹介しそびれて今更だけど…」

「えつ、えつと…松原花音です…」

「松原さんか。よかったら、俺にクラゲの良さを教えてくれない？」

そこから方向音痴ちゃん改め、クラゲ大好き松原さんは、ショッピングモールに着くまでの間、クラゲについて語ってくれた。なんでも、クラゲの海を漂う姿は美しく、水族館のカラフルな照明に照らされた姿はとても綺麗なんだと。それを楽しそうに話す松原さんを見て、松原さんのクラゲへの愛がよく伝わってきた。本気で好きなんだな、クラゲ。

「あ、見えてきたな、ショッピングモール。」

「もうすぐかな？」

気づけばショッピングモールまであと少しのところまで来ていた。いやー、最初はど
うなるかと思つてたけど何とかなるもんだね。

「ほんとに助かつちやつたな、石動君がいなかったら私、ここまでたどり着けなかつただ
ろうから…。」

「やっぱ方向音痴なんすか?」

「うん…昔からなんだ。1人で目的地まで行けなくてね…」
「なるほど…」

思ったとおり、松原さんはリアル方向音痴だった。しかも筋金入りの。そのことを悩
んでるみたいだけど、気にしないで!とでも言うべきか?考えているうちに、俺たちは
入口の手前までたどり着いた。

「着きましたねー。」

「うん。石動君、今日は本当にありがとうございます。」

「いえいえ、このくらいどうってことないですよ。」

「石動君にとつては些細なことかもしれないけど、私はほんとに助かったんだよ。それじゃありがたいがとね。」

そう言つて、松原さんはショッピングモールに入ろうとする。

：迷つたけど、どうせもう会うことなんてないんだから、最後に言いたいこと言つてやろう。

「松原さん。」

俺の突然の呼び掛けに、松原さんは振り向いてきよんとする。

「俺、迷子なことつて決して恥じるべきことではないと思ふんです。だつて目的地にたどり着いちやえば、それは迷子じゃなくて寄り道つて捉えることもできるじゃないですか。だから、迷子なことにそこまで負い目を感じなくてもいいと思ふんですよ。あ、もちろん待ち合わせの時間に遅れない範囲でだけどね？」

まあ俺の考えとかじゃないんですけどね。100%受け売り。

「もつと気楽でいいんじゃないかな？人生、笑っていれば大抵のことは何とかなるから。それに、迷子の間に新しい発見とか出会いとかあるかもって考えると、ワクワクしてきませんか？」

一瞬、彼女の瞳が大きく揺らいだ：気がする。

「ありがと…そんな風に考えた事、1度もなかったな…」

「そうですか？人生楽しんだもん勝ちですよ、笑顔でいきましよう。」

「ふふっ…うん、そうだね。石動君、今日はほんとにありがとね。」

「どういたしまして、それじゃあここら辺で。」

「うん。」

俺と松原さんは、それぞれの目的を果たすため、別々の方向に向かった。それにしても、戸山さんといい、松原さんといい、この街の女子のレベル高いな。まじで美少女。色々考えつつ、俺は優一さんが居るであろうフードコートを目指す。わざわざ呼び出すくらいだ…きつと重大な話があるはずだ。

「響真、お前にはこれから楽器の練習をしてもらおう。」

…まじで何しに来たんだろ、俺。

第4話 Lesson 1 「毒をもつて毒を制す」

フードコートに来てハンバーガーとポテトのセットを頼んだ俺は、優一さんの前に座って話を聞いている。

「何がいいかな…ギターにベース、キーボード、ドラム…あ、ボーカルでもいいよ。」
「まてまてまてまて。」

勝手に話を進める優一さんを俺は止める。

「なんで楽器の練習しなくちゃならないんだ？俺、地球を滅ぼしに来たんだよな？」
「そうだよ。」

答えになってねえんだよ…しかも楽器のラインナップからするとロックバンドっぽいし。

「状況がかなりまずくなってきたんだよ。この世界の神の妨害があった以上、このまま

作戦を実行するのはおそらく不可能だ。この先も神に邪魔されると考えたほうがいい。だからこつからは保険をかけていくんだ。」

そう言う優一さんの顔はガチだった。こちらをまつすぐに見つめるその視線からは、とても冗談を言ってるようには思えない。でもさあ…

「仮に保険をかけるにしても、楽器の練習で神とやらをどうにかできるとは思えないんだが。」

「この世界において音楽ができるかどうかはとても重要なんだよ。上手く演奏できれば最高…下手でも音楽に対する知識や関心はあつたほうがいい。そういう風にできてるんだよ。」

「なんか胡散臭いんだよなあ…」

正直、言ってることは何一つわからないし、とてもじゃないが信じられない。でも…

「信じるしかないんだろうな…」

「おいおい、信じてくれよ。俺はお前の味方だぜ？」

そう言つて、優一さんはニツと笑つて立ち上がる。

「早速買いに行くぞ、実際に見て選んだ方が絶対にいいからな。」

俺は残っていたポテトを口に放り込み、優一さんの後に続いた。何にしようかな、楽器。

イラツシャイマセー、ナニカオサガシデシヨウカー

アツ、シヨシンシヤナンデスケド…

はい、という訳で私はベースを買いました。正直ベース一択だった。前からちよつとやってみたかったんだよね。だつてかつこよくね？ベース。

俺が選んだのは、白いボディに黒のピックガードのやつ。性能とかはよくわからなかったから見た目で選んだ。初心者だからアンプとかチューナーとかケースとかも全部セットで買った。

これだけ買ったから、まあお値段もそれなり…だったけど、エボルトが資金を出してくれるので、お金のことは気にしなくていいらしい。優一さん曰く、エボルトから受け

取った金額は、一等地に別荘をいくつか建てれるくらいのレベルらしい。

：まともな金なのかあやしいところだと思います。はい。

その後は今日の晩飯を買って、帰りは優一さんの車に乗って家に帰ることにした。

「それで？ベースはどう？」

「まだなんとも…少し触った程度だし…」

「そりやそうか。」

家に帰って早速ベースを触ってみたが、これが難しい。初心者向けの動画を見てたどどしくも弾いてみたが、指がイカれるかと思った。動け、左手。

他愛もない話をしながら、優一さんと晩飯を食べる。今日のご飯はカレーじゃ。おいしいおいしい。

「じゃあそつちは任せるかんじにして、今から響真に備わった能力について説明をしてもいいか?」

「俺の能力? エボルトの能力は大体わかってるけど…」

流石にスペックまでは覚えていないけどね。あれでしょ、胸元の水色のところからコブラだすやつとか。これはスタークの能力だけどね。まじアドベント。

「そうか。なら早速使い方の説明から入ろうかな。」

「使い方あ?」

「順を追って説明するわ。まず、響真はこつちの世界に来るときにコブラボトルを持たされただろ？あれ、今響真と融合してる状態なんだよね。」

「そういえばそんなのあったね。なくしたのかと思ってた。」

「そのコブラボトルを自在に生成できるようにするのが当分の間の目標だな。」

「え？出せるの俺？どうやって出すの？」

「エボルトが言うには、体中の力を開放して、それを手に集中させて、ボトルの形状を強くイメージする。そしたらフルボトルの生成ができるらしい。」

”練”と”凝”かな？」

俺は椅子から立ち上がり、早速言われたとおり体にグツと力を入れて、ボトルの力を増幅させる。そしてそのまま力の流れを右手に収束させる……！

しかしそこで、体からあふれ出していたオーラのようなものが途切れてしまった。その反動で思わず床に膝をついてしまう。

「ハア、ハア……体が動かねえ。」

「まあ一発でできるもんじゃないよな。エボルトの予想だと一週間ぐらいでできるようになるらしいから、ベースと平行して練習しといてね。」

「りよ、了解でーす…」

なるほど、ベースとフルボトルの生成の技術は一朝一夕では身につかないと。また一つ賢くなつてしまったな…

あれから一週間が経過した。優一さんの言っていた目安は今日だ。

…しかし俺はいまだにフルボトルの生成ができていない!!力の集中まではできたんだよ…でもね、そこからフルボトルにできないんだよ。なんでだろうね。そんなに下手か?わしのボトル生成は。(そうだよ)

やばいよどうしよう…!早くできるようにならんと!日を追うごとに優一さんの表情が険しくなつてきてるんだよ!ごめんさい、ほんとに!!

「うーん。これは思つてた以上にこの世界の神の力が強いみたいだな。」

「すみません、優一さん。俺、全然できなくて…」

「いや、いいんだ。響真は悪くないよ。ただ、どうしてもこのままだと計画に支障をきたすだろうからなあ……」

「すみません……」

しばらくの間沈黙が続いて、優一さんが口を開く。

「…響真、賭けに出してみる気はないか……？」

「賭け？」

「ああ。成功すればエボルトの能力を手に入れられる。」

「失敗すると？」

「…タヒぬ……」

「…どのくらいの確立でタヒぬの？」

「……7割。」

「い、いやだ……」

ふむ。ワシにしねとのかね！ぜったいにいやだね。（鋼の意志）

……いや、待てよ。もしその賭けとやらに成功して生き残ったとしても、俺は人外さんになつて地球を滅ぼすことになるんだよな。まじアウトサイダー。逆に失敗して死ぬば、この頭のいかれた計画から離脱することができる。まじ魂の救済。正直ここで生涯を終えるのもありなのかもしれない。こつちの世界に來た時点で俺は死んでしまったようなものだからな。ならばここは、賭けに出るの一択では?!（錯乱）

「やっぱりやるわ。」

「……ほんとにいいのか?」

「まあ、ソシャゲの闇深ガチャよりかはだいぶ良心的だから。」

「…ガチャは何度もできるだろ。」

「マジレスやめて。」

なんとも言えない顔した優一さんは、ジャケットの内ポケットから液体の入った小瓶を取り出した。そっちから持ち出した話なのに。なんやその目はあ…（王者の風格）

「こいつはエボルトの毒だ。少々荒療治にはなるが、こいつを飲んでもらう。」

「なるほど、まずそう。でもほんとにこれで力はあるのか？」

「体にシヨックを与えて無理矢理覚醒させるんだ。名付けて『毒を以て毒を制す作戦』。俺は、この世界の神は響真の力を奪ったのではなくロックをかけているんだと考えてる。」

「ほう。」

「そしてこの毒を飲めば、響真の中に眠っている九つの特殊能力《星狩りの転生特典》を解放することができるはずなんだ。」

「九つの能力？ 巨人の力かな？」

「いや、デイケイドを意識したんだろ。多分だけど。」

九個もくれるのか。エボルトはいいやつだな（クソチヨロ）

「それじゃあ早速いただきますかな。」

毒と言われたそれを俺は躊躇なく飲み干す。…うん。無味無臭だね。もつとまずいものだと思つてたわ。これなら優一さんの淹れたコーヒーのほうが余裕でまずい。…ん？

「ガハッ?!ゴホツ、ゴホツ…い、く、苦しい…い、体が…焼ける…い」

身体中から汗がどつと出て、その場にのたうち回る。上手く息が出来ない、これはほんとに死ぬかもな。俺は猛毒に襲われて、そのまま意識を失ってしまった。

「んあ…」

頭がガンガンする…。体は鉛のように重いのに空を飛んでいるみたいなの高揚感がある。熱もあるみたいで死ぬほど気持ち悪い。でもこのかんじは…

「生きてるじゃん、俺」

体がある、呼吸もしている、俺はまだ生きてる。生の実感を噛み締めつつ、ベッドに寝ていた俺は起き上がろうとする。ちよー喉乾いたわ。

「☒真君…?」

「えっ、戸山さん?! どうしてここに??」

「ひっぐ…よかった…よかったよお…」

なぜか俺の部屋にいた戸山さんが突然泣き出した。なんで戸山さん泣いてるの? やばい、女の子が泣いてるときってどうしたらいいんだ? わかんない、わかんないよお!! 有識者、助けてくれ。

「えーつと、と、戸山さん?大丈夫?」

「ひっぐ…ごめんね、安心したらなんか涙出ちゃって。」

「ええ…泣くほど?」

「だって! 40度以上の熱が3日間ずっと続いてて、ずっとうなされてて、そうだと思うたら今日は静かで、死んじやったのかと思っただもん!」

「ごめん、心配かけてごめん。」

そんなにやばかったんか俺。そら泣くわ。つい先日まで普通に会話してたやつが死にかけになってたら、中学生は泣くよ。

「☒真君もう熱大丈夫なの？」

「まだちつとだるいけど、大丈夫そうだな。」

「よかった…」

「とうかわざわざお見舞いに来てくれたんだな。ありがとう、戸山さん」

「どういたしまして！そうだ、プリント届けに来たんだった。はい、これ。」

「まじか、ありがとう。」

戸山さんめっちゃ優しいやんけえ…陰キャは女子に優しくされると勘違いしちゃうんだぞ！まあ俺は意識高い系の陰キャだから勘違いしたりしないけどな。

というか会って間もない異性の家に1人で来るとかやばいだろ。いや？中学生ならギリセーフか？やっぱダメだな、アウトだろ。それにプリント届けるだけならポストに入れるとか、優一さんに渡しとくとかでもよかったと思うのに。意外と律儀なのかな。

「戸山さん今日はわざわざ来てくれてありがとね。風邪移しちゃうと悪いからそろそろ…」

「そうだね。☒真君、明日は学校来れそう？」

「あー、多分行くかな。」

「じゃあ明日からは一緒に行こうよ、学校！」

「ウエツ」

「だめ？」

「いいよ、別に。これからお供いたします。」

「うん！じゃあまた明日ね！」

「ああ、玄関まで見送るよ。」

戸山さんまじいい子だなー。でも距離の詰め方ちよつとえぐかったな。陰キヤに優しい陽キヤ女子って存在するんだ…（遠い目）

そんなことを考えながら、俺は戸山さんを見送るのであった。

俺は部屋に戻ってからベッドに腰掛ける。やつぱりまだちよつと立つてられないわ。正直しんどい。…あれ？俺生きてるってことはフルボトル出せるんじゃない？

一旦思考を止めて体中の力を解放させる。ギリギリまで放出したそれを今度右手に

集中させる。そしたら力を一点にさらに集中させてフルボットの形状を強くイメージする。すると不安定だったオーラが段々と質量を持ち始めて……

「できた……これがコブラフルボトル……」

俺の右手には銀色のコブラの装飾が施されたフルボトルがしっかりと握られていたのであった。

第5話 想定外で最低な1日

俺がコブラフルボトルを生成できるようになった翌日、昨日の気だるさは全くなくすつきりとした目覚めだった。実に清々しい……まるで生まれかわったみたいだ。あれだね、一度生死を彷徨うレベルの地獄を味わうと、何の変哲もない日でも甘美なものに感じられるな。雀のさえずりですえ美しく聞こえてしまう。なんてことを考えつつ、俺は部屋を出てリビングのドアを開ける。

「おはよう、響真。気分はどうだ？」

「おはよー、めっちゃいい感じだわ。」

すでに起きて朝食を用意していた優一さんと軽く会話しながらテレビをつける。適当に星座占いをやっているニュース番組にチャンネルを変えて、キッチンに向かう。

「うわ、響真最下位じゃん。ドンマイ。」

「一瞬で気分下がったわ。」

今日の最下位は双子座のあなた。やることなすこと全てうまくいきません。ラツキーアイテムはキヌガサダケのスープです。今日一日頑張ってください！

なんてこと言うんだ、このアナウンサー。そんな占い初めて聞いたぞ。言い過ぎやろ。しかもラツキーアイテムが入手出来そうにないのですが。

「それで？ボトルの生成は？」

「完璧よお」

俺は優一さんの目の前で、コブラフルボトルを出してみせる。昨日は精神を集中させないと出せなかったが、今は片手間で出せるくらいにはなった。特訓の成果つてやつだよ、これが。

「へえ、やるじゃん。」

「まあな。慣れちまえばこっちのもんよ。」

「いやーよくやった。一時はどうなるかと思っただが、よかったよかった。待ってろ、今コーヒー淹れてやるからな。」

俺は精一杯の笑顔でいらないと言ってやったのだった。

さてこれから三日ぶりに学校に行くわけだが、その前に俺は戸山さんに会わなければならない。昨日一緒に行こうって言われちゃったからね。そりゃ行くしかないでしょ。それにしてもあんな美少女と一緒に登校できるなんて、ここはギャルゲーの世界か？

そんなことより、集合時間とか決めておけばよかつたなって、家出てから気づいたわ。戸山さんまだ家にいるかな？ いるよね？ ……気長に待つか。

10分後

だまされた(血涙)

この時間になっても戸山さんが出てこないとなると、もう先に行つてるとしか考えられない。陰キヤに優しい女子なんていなかったんだ。きつと教室に行つたら「ごめん。陰キヤ君、昨日の約束忘れてた〜ww。許してwwww。」されちゃうんだあ。別に辛くなんかないもん！ つらくないもん……はあ、俺も行くか…

「大丈夫、走れば間に合うから！行つてきます!!」

ちょうど俺が学校に行こうとしたとき、戸山さんが勢いよく玄関のドアを開けて飛び出してきた。ちゃんといました。つぶねー、待つててよかつたー。

「え、響真君、待つててくれたの?!」

「昨日誘つてくれたから…もしかして迷惑だったか?」

「ううん、うれしい!一緒に行こつ!」

「ああ、急がないとな」

昨日のあれが社交辞令だったらどうしようかと一瞬考えたが、どうやらそんなこともなさそうだ。俺と戸山さんは遅刻を免れるために、走つてで学校に向かうのであった。

はい。というわけで帰宅フェーズです。いやー、三日も休んでたらクラス内でそれなりにグループができてたのは驚いたね。席が近い奴らが話やすい人たちばかりで助

かったよ、ほんと。

「それでさ、響真君は何部にするの？」

「んー、陸上かな。」

帰り道が一緒なので、俺はまた戸山さんと並んで歩いている。ちなみに俺たちが通つてる中学は必ずどこかの部活動に所属しなければならぬので、今はそれ関連の話をしている。陸上は前の世界でやってたからね。適当でいいんだよ、どうせ全部壊しちゃうんだから。

「そっかー、私どうしよっかなー。」

「まだ決めてないの？部活動見学してきたじゃん。」

「いやー、どれも楽しそうで…」

「ふーん、まあ、まだ時間あるし気長にいけば？」

戸山さんは陽キャ気質だから女テニとか女バレとかかな。ちよー偏見なんだけどね。ごめんなさい。

「でも部活が始まつちやうとこうやって一緒に帰れなくなつちやうねー。」

「朝一緒に行くからいいじゃん。」

「そうだね、あつ！今日はごめんね、朝遅れちゃつて…」

「いや、間に合つたし別にいいよ。」

「ほんとにごめんね！」

その後、どうでもいい会話をしていたら家に到着したので俺は戸山さんと別れて家に帰つたのだった。

「たでーま。」

「おう、おかえり。鞆置いたらリビングに来て。」

「了解でーす。」

何事かと思い、俺は自分の部屋に鞆を放り出して、リビングに向かう。この前みたいに楽器やれとか言われるのかな。次はなんだろうな。

「来たな、響真。まずはこれを見てほしい。」

そう言う優一さんの目の前には、かなり嚴重なカプセルに保存された、赤いアメーバのようなものが鎮座していた。

「え、なにこれ。」

「エボルトの細胞の一部だ。」

「なんでこんなものが？」

「まあ、実験の副産物ってところかな。」

「実験？副産物？」

「《世界を旅する力》でエボルトはこつちの世界にどうにかして来れないか色々と実験をしていたんだよ。その結果、意思を持たないレベルのエボルトの細胞や血液はなんとか侵入できることが判明したんだよ。」

「なるほど。それで、俺はまたこれを食べればいいのか？」

「食べる必要はないよ。こいつは近くににいる人間の中で最もハザードレベルの高い者に入り込むようにプログラムされている。つまり開けたら響真に取りつくようになってるんだよ。」

「もし俺よりも優一さんのハザードレベルが高かったら？」

「そんなことあるわけないだろw。響真はもう半分化け物みたいなものだから。人間の俺が勝てるわけないんだよ。」

「へえ…」

「こいつと融合することで、真は完全な地球外生命体になれるんだ。」

そうか、俺はもう半分人間じゃなかったのか。フルボトル出すくらいしかできないから全然実感わかないんだけど。

「じゃあ早速開けていくぞ。準備はいいか？」

「よっしゃこい！」

「言い忘れてたけど入り込むとき激痛で気絶しちゃうかも。」

「え、ちよま」

カシュツという音を立ててカプセルの蓋が開かれ、深紅のそれは這い出てくる。ベチャリと机の上に落下して、こちらに近づいてくる。そして俺の目の前で停止する。

数秒の間、俺はそいつを凝視する。そいつはプルプルと震えだした次の瞬間、俺に向

かつて勢いよく飛んできた！

ヒュン、パリーン

……

……

……

え
??????????

なんかあれ吹っ飛んでっただが？俺を飛び越えて窓割って go away したんだが？話と違うんだが??

「……」

二人でしばらくの間割れた窓ガラスを眺めてみる。時刻は午後5時。空も夕焼け色に染まり、カラスが飛び交う時間だ。今日の晩飯は何だろうかなあ…

「やばい、やばい、やばいぞ、響真！」

「うん、そうですね。」

「今すぐ追いかけるぞ！」

ぶっ飛んでつたエボルトの細胞を見つかるべく、俺たちは家を出てそこらじゆうを探しまくる。

最悪だ……うん、ほんとに最悪だ……。さっきの優一さんの話が本当だとすると、それはここら一带に俺以上のハザードレベルの持ち主がいるということの意味する。俺よりも強いだなんて、絶対にこの近くにあいつがいるとしか考えられない……！

埒が明かかないと思った俺は一旦走るのをやめて、神経を集中させる。さっき見たエボルトの細胞の気配を探し出す。あんなに禍々しいオーラを持った物体だ……嫌でもすぐにわかる。

見つけた……！ここから真つ直ぐ3 km先！駅周辺か？

俺はそこに向かって全速力で走りだす。奴にとられる前に何としてでもエボルトの細胞を取り戻す！

しばらく走って、俺は目的地の駅にたどり着く。夕方の帰宅ラッシュの人混みをかき

分けて、俺はそいつを見つける…が、

(チツ、遅かったか…)

目の前にいる同年代の男は俺が元いた世界のフィクションでしか見たことはなかったが、こつちの世界でもあまり差はないんだなって思ってしまった。だって俺は一目でそいつが、

万丈だつてわかつてしまったから。

なぜこの世界にも万丈がいるんだ。そして万丈からは先ほどのエボルトの細胞の気配が…いや、それ以上のものだ。万丈の本来のスペックも相まってオーラがさらに禍々しく見えてきた。今はハザードレベルにさほど差はないが、きっと伸びしろは俺以上だ。嫌でもわかる。どうする？今ここで消すか？

「痛つった！何?!何だ?!」

いや気絶しないのかよ！強いな！

エボルトの細胞が入り込んだのに万丈はピンピンしている。そしてそのまま改札を通り抜けて駅のホームに向かっていった。

…そういえば今日の占い最下位だったな。そんなことを考えながら、呆けた顔で俺は駅の改札をただ眺め続けていたのであった。

第6話 深まる謎と地下室

「万丈龍也。中学一年生。格闘技を小学生のときからやっていて、その界限だとそこそこ名の知れた選手らしい。生年月日は……」

翌日、優一さんの調べで万丈の情報が入った。どうやって調べたのかわからないが、生まれた病院、生まれた時の体重まで調べあげられていた。そして名前が龍我じゃなくて龍也だった。名前が違うのはこの世界の万丈が本来のビルドの世界の万丈とは別物だからなのだろうか？

「これもイレギュラーなのか？」

「ああ。まさかこの時点で響真よりもハザードレベルの高い人間がいたなんて……」

地球滅亡が遠のいたことを喜ぶべきか、計画がうまくいってないことを嘆くべきか……でも失敗したらエボルトが俺を消すために刺客を送ってくるかもしれないし、絶対後者なんだろうなあ……。

「というか万丈、なんで人間やめた俺よりハザードレベル高いんや。あれか？お前も転生特典か？あ？」

「そしてなりより神に一杯食わされたつてのが気に食わない。：そりやこっちは地球からしたら病原菌みたいなものだから妨害してくるのもわかるんだけどね。はい。今、石動菌とか思ったやつ、後でしめるからな。」

「それでもやっぱり出し抜かれたかんじは悔しい。生憎、やられっぱなしは性にあわないでね。正直なんかやり返したい。」

「まあ過ぎてしまったことは仕方ない。次に向けて行動しよう。」
「りょーかい。」

「このままだと計画が失敗して俺たちの敗北が決定してしまうので、早めに何とかしたいものだが。まあ最終的に目標達成できればエボルトもよしにしてくれるでしょ。ダメ？」

「エボルトの細胞を取り戻すため、俺たちは万丈のハザードレベルを融合可能レベルの5.0まであげなければならなくなった。」

「ふむ…やはりハザードレベルが低いと融合はできないのか…」

「ああ、だからまずはトランスチームシステムの開発を優先しようと思っている。」

「ん？トランスチームシステムはともかく、ライダーシステムって作れるの？ネビュラガスないじゃん。」

そう、この世界にはスカイウォールがない。つまりネビュラガスも存在しないはずだ。だからトランスチームシステム一式が作れても、ライダーシステムは作れるわけがない、そう思っていたのだが、

「あるんだなそれが。ちよつと着いてきて。」

そう言つて席を立つた優一さんの後に続き、冷蔵庫の前で止まった。そして冷蔵庫を開けると、

「ここから地下室に行けるようになっている。」

なんと冷蔵庫の下半分が地下室への入口になっていました。

…やばい、心がw k t kしてきたわ。まるで秘密基地に来たみたいだぜ。テンション上がるなあ。でもしようがないよね？男の子だもん。

早速中に入ってみると、入口は狭かったが中はかなり広くなっていて、壁と天井にはいくつかの配管が取り付けられていた。おそらくトランスチームシステムやライダースステムの開発するための装置やコンピュータらしきものも置いてあった。

「ここら一带の地下からは天然のネビュラガスが発生していて、取り放題なんだよ。それをこの管で回収して、ボンベに詰めて保存しているってわけ。」

「なるほど、これならライダーシステムシステムの開発も問題なく行えるな。」

「そういう訳だ。それじゃあ俺は書類とかデータとか持つてくるから、今日から開発が**ん**ばってね。」

「何だその言い方、まるで俺一人でやるみたいだな…」

「うん、そうだよ。」

「ウエツ」

「自分で作ったほうが仕組みとかスペックをしつかりと理解できるだろ？だから☑真一人で作り上げて欲しいんだよ。」

「わかったよ…ちなみにいつまでに？」

「夏休み入る前までには完成してて欲しいなー。」

約3ヶ月か…いけるか？兵器の開発なんてしたことないからわかんないんだけど。

「まあ最悪トランスチームガンだけでもいいよ。スチームブレードはできれば欲しいけど優先度は低いからな。とにかく夏までにブラッドスタークになれるようにだけはして欲しい。」

必要なものは揃ってるみたいだし、図面もある。まあこれなら何とかなるのかな？今日はもう夜遅いので寝るとして、俺は次の日から作業に取り掛かるのであった。あ、こっから長いので日記形式でいきます。

4月15日

今日からトランスチームシステムの開発を始める。まずは優一さんが出してくれた

読み込むことから始めた。どうやらトランジエルソリッドを活性化させて、トランジエルスチームに変換させるスチーム生成ユニットの製造が一番難しいらしい。逆にいえばそれができてしまえば、他は比較的簡単なのだろう。足りない素材の注文をネットですべて、今日は終わりにした。

4月16日

今日からしばらくの間は、スチーム生成ユニットの「ミスティックチャージャー」の制作をしていく。高温高圧流体技術を応用したもので、ソリッドを活性化させてガスに変換するための装置だ。プログラムは送ってもらったデータを打ち込むだけなので何とかできそうだ。これはフルボトルスロットのすぐ上に位置するので、それも一緒に作ることにした。

5月2日

ミスティックチャージャー並びにフルボトルスロットの製作が完了した。俺が生成したコブラフルボトルを使った簡易実験をして、規定値を超えるガスの検出が確認できた。これで一番めんどろなどは突破できた。この感じならもう少し製作のペースを下げてもいいのかもしれない。働きすぎはよくないと思うのだ。

5月4日

今日はミスティックチャージャーから生成したガスを一時的に溜めておくタンクの製作をした。それに伴い、ネビュラガスを貯めておくタンクも作っておいた。これがあるとどこでも人間をスマッシュにできるらしい。多分使わないと思うけど。買った部品をはんだごてでくつつけて終わりだったのですぐだった。

5月11日

最近はトランスチームガンの銃口である「ブレイジングスチーマー」の製作をしている。蒸気でできた高熱硬化弾であるスチームビュレットを撃ち出す衝撃に耐えられるように、強化素材を使用している。まあ仮面ライダーとの戦闘を想定しているので、トランスチームガンのほとんどの部分が強化素材になっているんだけどね。

5月22日

今日からガスを弾丸に変換する装置を製作する作業に入る。ここも結構面倒で、「蒸血」を宣言してトリガーを引いた時は特殊パルスを発生させてトランジエルガスを武装して装着し。ただトリガーを引いた時は弾を発射。引きつばなしにすると煙幕と3種

類もあるのでとにかく時間がかかる。エボルトには文句しかない。とりあえず会ったら絶対一発殴ろうと思った。

6月12日

ガスの変換装置がついに完成した。トリガーと音声認識システムも必要だったので一緒に作った。これで中身はほとんどできたので次からは外側を作っていきたいと思う。：まあ1週間は休むと思うけど。わしは疲れた。

6月18日

グリップの部分と銃の本体部分の加工ができた。ブレイジングスチーマーの時と同じで、アルミなどにトランジエルソリッドを混ぜた特殊な強化素材を使用している。これのおかげでトランスチームガンは軽いけど、仮面ライダー相手の戦闘でも通用する強度になっている。正直形になってきてかなりテンションが上がっている。しようがないね、男の子だもん。

6月21日

ついに試運転。今日はスチームビュレットが正常に発射されるかどうかを記録する

だけだった。結果は大成功。飛距離、威力ともに良好だったとだけここには書いておく。実にすばらしい。

話は変わるが、もうすぐ期末テストがある。戸山さんが悲鳴をあげていた。我関せずという顔をしていたら、数学を教えろと言われた。まあお見舞いの恩もあるったので了承する事にした。

6月29日

トランスチームガンが完成した。スピーカーを組み込んだのだが、まさか音声を自分でとらされるとは思わなかった。地下室にスタジオみたいところがあってそこで、「コブリア（ねっとり）」とか「ミストマアツチ」とかひたすらに発声してた。1人で。

この時気づいたのだが、どうやら声帯をいじれるようになったみたいだ。がんばって声真似みたいな感じでやろうとしたらくっそ野太い声でした。多分これが二つ目の転生特典なのだろう。

しよぼくね？

7月5日

ついに最終段階、ブラッドスタークのスーツのデータを打ち込む作業に突入した。こ

のデータをメモリに入れて、トランスチームガンに組み込むだけで、ブラッドスタークに変身できるらしい。ただこれもアホみたいなデータ量なのでめっちゃ時間がかかるんだが。

そして期末テストが終わった。戸山さんもやりきったようだ。

7月11日

最後にトランスチームガンのペイントを施して終了。ペイントにはエアスプレーを使った。ほとんど黒とシルバーだったのであんまり大変ではなかった。これで完成。

7月12日

最終チェックをした。ブラッドスタークに変身してしまった。さすがにテンション上がった。身体能力の上昇、スーツの強度ともに問題なかった。あまり言いたくはないが、楽しくなってきた。よかった。

今日の日記を書き終えて、そのままベッドに身を投げる。

長かった…。非常に長かった。途中、システムがうまく機能しなくて発狂し、めんど

くさい作業に何度エボルトに殺意を抱いたことか。トランスチームガン向こうから送ってくればいいのに。なんでダメなん？俺がシステムの理解とかする必要あるのか？いやつ、ないね（断言）

コンコンツ

「☒真、今ちよつといいか？」

「？、どーぞー。」

天井見ながらポケうつとしてたら、ノツクの音が聞こえたので返事をした。それにしても珍しいな。優一さんが部屋に来るなんて。

「これを見て欲しいんだけど…。」

そう言いながら優一さんは、1枚のチラシを渡してくる。それを見ると、

「『この夏、期間限定！地球の神秘！パンドラボックス展示展!!』？」

「そう。この夏、都立の科学館で行われるイベントだ。普段研究されているパンドラ

ボックスが公開されるんだ。」

パンドラボックスもあつたのか。そりや俺が来てる時点であつてもおかしくはないし、何よりネビュラガスが発生してる時点でなんとなくあるんだらうなとは思つていた。

「パンドラボックスもパネルもボトルも全部研究所に嚴重に保管されているんだよ。でも、科学館に移動するならどうしても外に運び出さなければならぬ。俺たちはそこを狙う。」

「運び出すなら、警備は厳しくなるんじゃないのか？ だったら研究所に直接乗り込んだ方がよさそうだが……」

「あそこの研究所はかなり厄介な警備システムらしくてな。もし侵入して中に閉じ込められたりしたら、さすがに面倒だからな。」

「ふうん……なるほどね。」

「それに、今の響真なら警備員がいくら束になつても敵わないだらうからな。」

そういえば俺にはブラッドスタークの力があるんだつた。俺は兵器を所持している。

それも拳銃なんておもちゃに思えてしまうような代物だ。この力は簡単に多くの命を奪うこともできてしまうのだ。さすがに自衛隊とかが動いたら勝ち目はないと思うけど。

「というわけで、パンドラボックス強奪の算段を考えていこうと思う。」

「決行はいつ？」

「7月25日だ。」

「りよーかい。」

これが俺がこの世界に来てから初めての侵略行為だと思うと、心臓の鼓動が早くなり、うるさくなってくる。これが星の鼓動ってやつかあ…（違う）

っしやー、そろそろちゃんと思役やりますか!!

優一さんとの会話を終えて、俺は電気を消し、眠りにつくのであった。作戦の決行日はすぐそこだ。